広がる復興支援の輪

当市でも、東日本大震災により、住家や道路などに甚大な被害が発生。電気や水道などのライフラインが寸断されました。そんな状況下でも「自分のことは後回し」で、多くの市民が沿岸被災地へ。「困ったときはお互いさま」の精神で、復旧・復興活動にあたり、炊き出しなどを行いました。

その精神は、市民から企業同士へ。沿岸で被災した企業では、市内の空き工場などを活用し、会社を再建した例もあります。

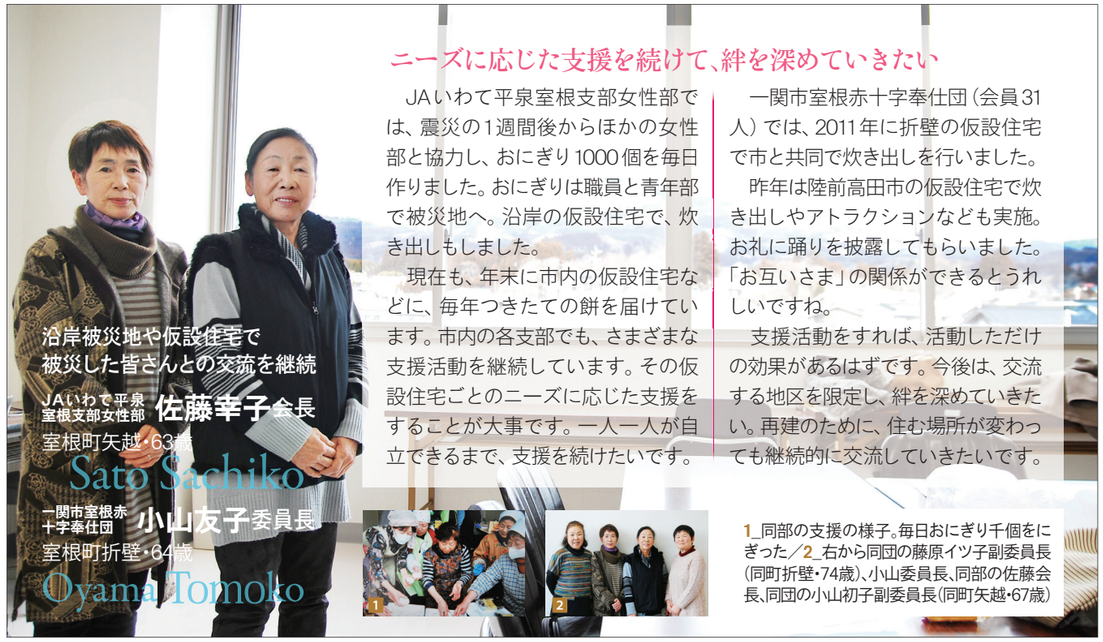
当市には、沿岸などで被災し、避難生活を送っている人たちが多くいます。このうち、藤沢雇用促進住宅には、26世帯57人が入居。徳田地区では、震災復興を願って2011年6月にふれあい絆水田「がんばっ田」を設置しました。以来、避難者を招き、田植えや稲刈りなど、年間を通してさまざまな交流会を開いています。秋に収穫された米は被災者へ。現在も、笑顔と復興の輪が広がっています。

共に歩む、共に生きる

大切な人の命、家や仕事を失った人たちの悲しみやつらさは計り知れません。震災の記憶を風化させないために、市は3月11日を「となりきんじょ防災会議の日」に制定しました。犠牲者の冥福を祈り、愛する人の命や大切な財産を守るため、何ができるかを家庭や職場で語り合いましょう。

がれきがなくなり、街並みが変わっても、震災前の生活に戻れない人たちがたくさんいます。「まちの復興」が進んでも「心の復興」が果たさなければ「生活の復興」はありえません。

自らも被災し、沿岸の復興を間近で見てきた私たち。きっと遠くにいる人よりも、ずっと力になれるはずです。まずは、被災地を訪ねましょう。私たちを勇気づけるように復興のつち音が聞こえてきます。避難している人たちに声をかけてみたり、支援活動に参加してみましょう。近いからこそ、寄り添える、手をつなげる、共に歩める―。私たちの一歩が、復興を後押しします。



ニーズに応じた支援を続けて、絆を深めていきたい

沿岸被災地や仮設住宅で
被災した皆さんとの交流を継続

JAいわて平泉 室根支部女性部 **佐藤幸子**会長
室根町矢越・63歳
Sato Sachiko

一関市室根赤十字奉仕団 **小山友子**委員長
室根町折壁・64歳
Oyama Tomoko

JAいわて平泉室根支部女性部では、震災の1週間後からほかの女性部と協力し、おにぎり1000個を毎日作りました。おにぎりは職員と青年部で被災地へ。沿岸の仮設住宅で、炊き出しもしました。

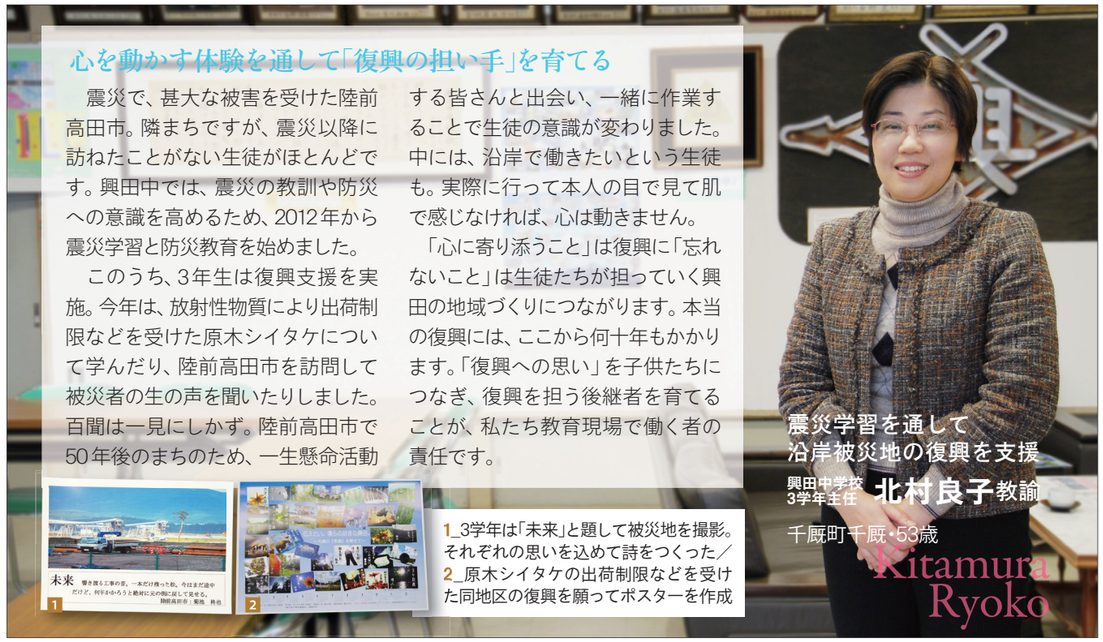
現在も、年末に市内の仮設住宅などに、毎年つきたての餅を届けています。市内の各支部でも、さまざまな支援活動を継続しています。その仮設住宅ごとのニーズに応じた支援をすることが大事です。一人一人が自立できるまで、支援を続けたいです。

一関市室根赤十字奉仕団（会員31人）では、2011年に折壁の仮設住宅で市と共同で炊き出しを行いました。

昨年は陸前高田市の仮設住宅で炊き出しやアトラクションなども実施。お礼に踊りを披露してもらいました。「お互いさま」の関係ができるとうれしいですね。

支援活動をすれば、活動しただけの効果があるはずです。今後は、交流する地区を限定し、絆を深めていきたい。再建のために、住む場所が変わっても継続的に交流していきたいです。

1_同部の支援の様子。毎日おにぎり千個をにぎった／2_右から同団の藤原イツ子副委員長（同町折壁・74歳）、小山委員長、同部の佐藤会長、同団の小山初子副委員長（同町矢越・67歳）



心を動かす体験を通して「復興の担い手」を育てる

震災学習を通して
沿岸被災地の復興を支援

興田中学校 3学年主任 **北村良子**教諭
千厩町千厩・53歳
Kitamura Ryoko

震災で、甚大な被害を受けた陸前高田市。隣まちですが、震災以降に訪ねたことがない生徒がほとんどです。興田中では、震災の教訓や防災への意識を高めるため、2012年から震災学習と防災教育を始めました。

このうち、3年生は復興支援を実施。今年は、放射性物質により出荷制限などを受けた原木シイタケについて学んだり、陸前高田市を訪問して被災者の生の声を聞いたりしました。百聞は一見にしかず。陸前高田市で50年後のまちのため、一生懸命活動する皆さんと出会い、一緒に作業することで生徒の意識が変わりました。中には、沿岸で働きたいという生徒も。実際に行って本人の目で見て肌で感じなければ、心は動きません。

「心に寄り添うこと」は復興に「忘れないこと」は生徒たちが担っていく興田の地域づくりにつながります。本当の復興には、ここから何十年もかかります。「復興への思い」を子供たちにつなぎ、復興を担う後継者を育てることが、私たち教育現場で働く者の責任です。

1_3学年は「未来」と題して被災地を撮影。それぞれの思いを込めて詩をつくった／2_原木シイタケの出荷制限などを受けた同地区の復興を願ってポスターを作成

徳田地区（藤沢町24～28区）の皆さん × 藤沢雇用促進住宅の皆さん

対談

㊧前列から一関市食生活改善推進員協議会藤沢支部長の三浦フミ子さん（67歳）、藤沢雇用促進住宅で生活する伊豆見宣子さん（気仙沼市・72歳）、同住宅での避難生活を終えて南三陸町に自宅を再建した阿部八代子さん（63歳）、藤沢雇用促進住宅で生活する千葉美奈子さん（南三陸町・58歳）と昆野桂子さん（気仙沼市・79歳）／後列は震災当時も28区自治会長を務めた千田博さん（68歳）、「がんばっ田」での活動を継続している農地・水・環境保全向上徳田地区活動組織代表の千葉ひろあきさん（67歳）、徳田地区自治会協議会会長・26区自治会長の畠山庸太郎さん（71歳）

三浦フミ子さん、千田博さん、千葉ひろあきさん、畠山庸太郎さん
伊豆見宣子さん、阿部八代子さん、千葉美奈子さん、昆野桂子さん

八代子さん　5年前、津波がまちを飲み込む光景を目にしたときはぼう然としました。「自然には逆らえない」ということを実感しました。

美奈子さん　集落の誰もが被災者でした。悲しんでなんかいられませんでした。

フミ子さん　徳田地区でも停電が。当日は、食生活改善推進員で地域の炊き出しに追われました。

博さん　沿岸の被害状況を知ったのは13日。話を聞いたときは、自分の家よりも沿岸被災地のことばかり考えていましたね。

庸太郎さん　14日、役場や赤十字よりも早く支援をしたいと、徳田地区の全世帯に生活物資の提供を呼びかけました。

ひろあきさん　突然の呼びかけでしたが、回収場所には長蛇の列が。誰もが、沿岸被災地を思っていることが伝わってきて感動しました。

博さん　集まった物資は2㌧トラック1台分。15日に、がれきでふさがった道を抜けて、避難所に届けました。その後は毎日、自治会と食改で沿岸被災地で炊き出しを行いました。

美奈子さん　津波に自宅を流された私たちは、避難所生活を余儀なくされました。

宣子さん　お風呂にも入れず、食料も限られていました。たくさんの人たちとの共同生活は、本当に大変でした。

桂子さん　炊き出しで、すいとんや豚汁をいただいたときは、本当にうれしかったです。仮設住宅の募集は、3月末から始まりました。震災がなければ、古里を離れるなんて考えもしなかった。不安もあったけど、安心もしました。

八代子さん　藤沢雇用促進住宅に応募したのは、仮設住宅ではなく普通の住宅だったから。避難所でも、仮設住宅でもなく普通の生活に戻りたかった。

美奈子さん　海を見れば、どうしても気分が沈みました。引っ越してほっとしましたね。

ひろあきさん　沿岸での支援を続けていた最中、知人に「藤沢雇用促進住宅の人たちも被災者だ。沿岸での支援だけが復興支援じゃない」と言われ、はっとしました。それで、4月24日に初めて交流会を開きました。

庸太郎さん　当初は、避難している人になんと声をかければいいかわからなかった。交流会をきっかけに、打ち解けられました。

博さん　6月12日に復興を願って名づけた「がんばっ田」に、避難者を招待して田植えを開催。100人以上が集まり、交流を楽しみました。

フミ子さん　それからは、春には田植え、夏にはホタル観賞や草取り、秋には稲刈り、冬には餅つきをして、交流を続けています。

宣子さん　振り返れば、徳田の皆さんとの交流を楽しんだ5年間でした。今では、昔から知っている仲間のような関係です。

美奈子さん　本当に楽しい5年間でした。皆さんとの交流がなければ、今の私はいません。

八代子さん　13年6月に古里の南三陸町に引っ越しましたが、週5日は藤沢へ。藤沢町は第2の古里です。

桂子さん　震災でつらい思いをしました。でも、震災のおかげで皆さんとの絆ができました。この経験は、私の宝物です。

庸太郎さん　私たちのほうこそ、避難者の皆さんに励まされました。これからも地域のみんなで、復興支援や交流会を続けたい。

博さん　今後も被災地の復興を支えていきたいと思っています。

フミ子さん　せっかく深まった絆。この活動を次の世代に継承できる仕組みも作っていきたいですね。

ひろあきさん　「がんばっ田」は、もともと水や農地のありがたみを感じるために、地域で取り組んでいた活動。地域にあった行事に、避難者の皆さんとの交流会を足しただけです。きっと、その1歩を踏み出すか踏み出さないかが「復興」のカギなんだと思います。